

「中国夢」は ただの白昼夢

中西輝政
京大学名誉教授

平野 聡

東京大学准教授

チベット、ウイグルなどの少数民族を圧殺し今や太平洋に覇を唱えんとする中国夢に、ユメ手を貸すことなかれ――

「日中友好」を強制

中西 昨今、尖閣を巡って日中間で緊張状態が続いています。しかし、中国の覇権主義による脅威は今に始まったことではありません。たしかに近代百年の中国は弱体化してしまいましたが、それ以前の時代、日本はし

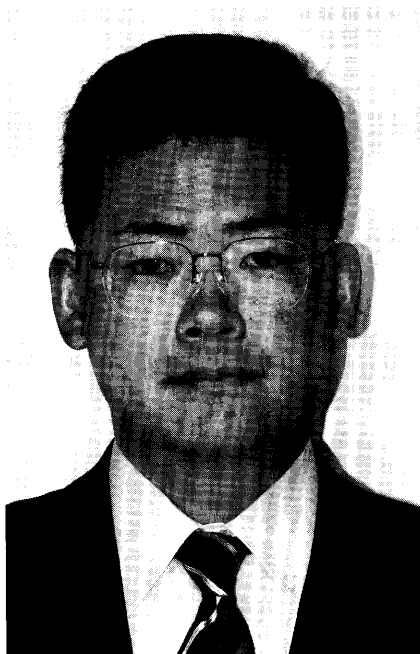
ばしば中国の侵略に脅かされてきました。たとえば、四人の皇帝の時代、中国によって日本は侵略される現実的な恐れがありました。一人目が唐の高祖。白村江の戦い（六六三年）で百済と日本の連合軍を朝鮮半島で破り、日本に攻め入ろうとしました。もしあのとき高句麗の反乱やウイグル（あるいは突厥）の侵攻がなければ、

唐は日本にまで攻め込んできたはず
です。

平野 二人目はフビライですか。

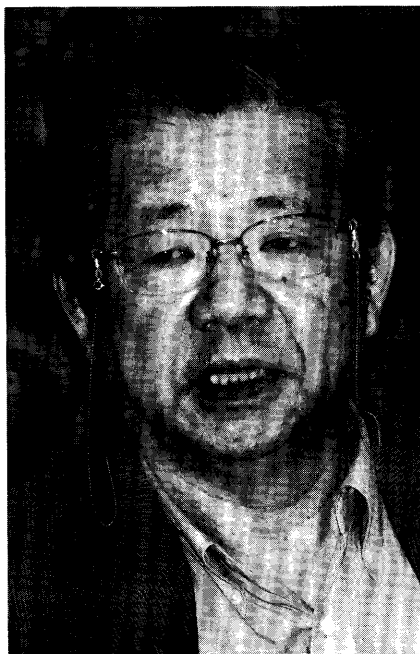
中西 そうです、フビライは二度の元寇を仕掛けて大失敗しました。そして三人目が明の永楽帝。十五世紀の初め、彼は宦官の鄭和に大航海を命じましたが、このような海軍力はあったのですから、もしあのときベトナムの反乱が起ころなかつたら、「征倭の拳」つまり日本遠征を必ず実行したでしょう。

平野 日本の周りには倭寇もいて近



ひらの さとし

1970年、横浜市生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。現在、東京大学大学院法学政治学研究科准教授。専門はアジア政治外交史。博士論文を出版した「清帝国とチベット問題」(名古屋大学出版会)で、2004年にサントリー学芸賞受賞。その他の著作に「興亡の世界史第17巻 大清帝国と中華の混迷」(講談社)がある。



なかにし てるまさ

京都大学名誉教授。1947年大阪府生まれ。京都大学法学部卒業。同大学大学院、英国ケンブリッジ大学歴史学部大学院修了。国際政治学、国際政治史、文明史専攻。90年石橋湛山賞、96年毎日出版文化賞、山本七平賞、2002年第十八回正論大賞を受賞。著作は「アジアはどう変わるか」、「帰還する歴史」、「大英帝国衰亡史」、「なぜ国家は衰亡するのか」、「情報亡国の危機」など多数。

づきがたかったのかもしれない。

中西 四人目が清の康熙帝。一六八三年、康熙帝は鄭氏政権を滅ぼして台湾を制圧したのですが、このときの台湾征服は一挙に大海軍を送るのではなく、台湾の中に内通者を育成するのです。習近平の中国が台湾企業に「サービスマイ協定」などでさらに大きな投資をして影響力を及ぼしていくのと似ています。ちなみに台湾を支配していた鄭成功の政権は清に制圧される直前、日本の徳川幕府にも軍隊の支援を要請しています。

清は実際に日本へ攻めるところまではいつてないのですが、内部から日本を攪乱することを目的に長崎や平戸にスパイを大量に送り込んでいます。記録によれば、清国商人の半分はスパイだったと幕府は見なしていたそうです。清の公式記録には日本へのこうした間接侵略や介入につ

いては一切書かれていませんが。

平野 「華夷秩序」で最も理解できない存在は日本です。日本に近づこうにも東シナ海は荒れ狂う海で、なかなか越えられない。私が学生だった一九九〇年に初めて出掛けた海外旅行は中国で、船に乗って行きました。遣唐使や遣隋使で人が多数亡くなったというのなるほどと思いましたし、向こうから日本に来るのも大変だったと思います。だからこそ、あの海のおかげで日本の安全が多くの場合保たれてきたと言えるかも知れません。

帝国主義的「崛起」

中西 さきごろ平野先生がお出しになった『反日中国の文明史』(ちくま新書)は中国の覇権主義、華夷秩序についてよくまとめられていますね。

平野 ありがとうございます。ここに書いたことは新しいことではなく、二〇〇〇年頃から私がうすうす感じ小出しにしてきたことを、執筆依頼を機にまとめたものです。

私はもともと高校生の頃からチベット問題に関心があつて、中国共産党によるラサ戒厳令(一九八九年)や毛沢東時代の過激な同化政策・仏教破壊が頭の中に常にありました。

ですから、胡锦涛が国家主席となり「平和的台頭論」を打ち出しても、あまりにも実態と乖離(かいり)していて信じられませんでした。むしろ彼らが好んで使う「崛起」という言葉そのものでしょう。すなわち、より強硬な姿勢で、帝国主義と同じように強大化した国力を振りかざし、少数民族も抑えつけていくだろうと——案の定、二〇〇八年の北京オリンピックの直前にチベット問題が深刻になり、翌

年新疆ウイグル自治区のウルムチでも衝突事件が発生しましたが、中国は少数民族と対話することなく力で抑えつけました。

しかし、残念ながら私の意見に賛同してくれる中国研究者は少なかつたように思います。中国も次第にグローバル化した世界の一員としてふさわしい行動をとり、中国なりの方法で社会が良くなるだろうという楽観論が多数でした。中国はそうなたでしようか？

そして、習近平が国家主席になって以来「中国夢」を強調しています。夢の内容たるやまことに身勝手なもので、自らの力を全世界に知らしめ、世界をリードしようという方針を明確にしているのです。私にとつてこのことはまったく不自然ではありません。中国のプロパガンダ、国内問題、ナシヨナリズム、対外強硬

策を見ていると、私が長年感じてきた中国の危険な兆候は間違いではなかったと確信しました。

中西 実は私もこの二十年の間、その当時の大部分の日本人と中国への見方がかなり違っていたから、自分の対中認識が間違っているのかな、と思った瞬間が何度もありました。とくに日本の政界・経済界のリーダーや学者の中国観がひどかった。思想



平野聡
「反日」中国の文明史
(ちくま新書)

上から親中イデオロギーに染まり切っていた日本の大半の中国研究者は別にしても、天安門事件の後でも外務省とか政府高官のほとんどが描く中国像はまるで「お花畑」。中国によるプロパガンダ戦術という色合いの濃い『大地の子』以来の、あの穏和で

「人のいい中国」といったチャイナ・ドリームを日本人がまさに夢想している感じでした。とくに実情をよく知っているはずの中国研究者の言説も極めて不自然でした。明らかに中国は脅威なのに、予定調和的に「日中友好論」につなげる。マスコミは朝日新聞などが「北京の空は青かった」という文革礼賛記事を満載し、本多勝一記者の「南京大虐殺ルポ」を掲載していた頃の七〇年代から二十一世紀までずっと、ついほんの数年前まで、とにかく日本全体がきわめてナイーブな中国賛美一色に染まっ

いたわけですよ。

平野 今からみれば、中国に合わせれば自らの道徳心を示せるという、一種の自己満足ですね。

中西 とくに尖閣問題が大きく浮上するまでは、そもそも中国に対し批判や疑問を持つこと自体が日本のマスコミでは非常識だと見なされてきましたね。政府の審議会でも中国を問題視する発言をしたら、「もう来なくてよろしい」みたいなお沙汰があったこともありませう(笑)。

平野 日本国内には、中国共産党が世界の最貧国といわれながらも、これだけ「人民的でお互いが助け合う」素晴らしい社会を作ってきているのだから、それを擁護し、あるいは助け、日本も学ぶのが知識人の役目だと考える人が多かった時代が確かにありました。

中西 そのとおりですね。私の若い

頃、たしか一九六〇年代、佐藤内閣までは冷戦構造的な、中国を恐ろしい脅威と見る発想が残っていました。その頃はまだ中国を賛美する人は左派、つまり共産シンパや進歩派の日本人だけだった。

ところが、田中角栄訪中の前後になると、急に「日中国交正常化」を叫ぶ気運が高まり、中国の国連加盟とか台湾との断交についてアメリカのような合理的な議論はほとんど消され、わずか数年のうちに日本全体が盲目的な中国賛美に傾いていきました。NHKのニュースでも公式の肩書があるのに、わざと日本人の親中感情を盛り上げようと、中国の要人には必ず「さん付け」していました。もちろん欧米の要人は呼び捨てです。あの、アジア主義的な「日中友好イズム」は実に嫌な感じで今でも忘れられません。

平野 中韓には「お隣の」とつけ、台湾にはつけないのは何故でしょう。ともあれ日本では、一つの議論が大勢を占めると、それに従うべきだという見方が出てきますね。

中西 これは私の持論ですが、戦後日本では、安全保障や外交に関して集団心理で合理性を排除する精神的ソフトファシズムが支配していたと思います。

それで思い出すのが、八〇年代の終わり頃、私が関東方面のある大学に赴任した際に先生方が開いてくれた歓迎会での出来事です。天安門事件の直後だったので、「戦車で市民を殺すなんてとんでもない。日本も中国には明確に制裁を課すべきだ」と全く空気の読めない発言したところ、場が凍りついたのを覚えています。中国を研究する先生方からは「とんでもない奴が来たぞ」と警戒され、結局

その中国専門家の方々とは友好関係を結ばませんでした。

天皇陛下を差し出す

平野 六四天安門事件の話がでしたが、あれは凄惨な事件でした。

中西 七〇年代の終わりに文革が終わってから鄧小平が改革開放を進めて、政治改革を正面から掲げる胡耀邦が出てきた。「中国はこれで共産主義を捨てるのかな」と私も一瞬、思ったことがあります。

平野 胡耀邦と趙紫陽は共産党体制の問題点をはつきりと認識していたと思います。

中西 あのとときの私の見立ては必ずしも間違っていなかったと思いますが、やっぱりナイーブだったな、とも思います。

平野 しかし、胡耀邦の死をきっかけ



1992年の天皇陛下訪中の様子。陛下の隣にいるのが楊尚昆。汚れた手でなれなれしく陛下に触るな(写真提供:時事)

けに、学生を中心とした民衆が天安門広場に集まり民主化を訴えたところ、軍によって弾圧されました。

中西 あの時から、鄧小平路線の中に秘められていた孫子の思想と共產主義が結びついた悪魔的な怖さを感じました。ハーバード大学のエズラ・ボーゲルなどは今も賛美していますが、私はあれ以来、鄧小平は本質的にはスターリンだと感じましたね。いずれにせよ中国は力のみを信奉する国で、改革開放が進んでも共産党独裁が続く限り結局は何も変わらないのだと確信しました。

平野 鄧小平自身も判断に悩んだと思います。改革の必要性を感じつつも、自由を認めれば国が分裂する恐れや、混乱で経済が停滞・後退する恐れもあった。保守派からの圧力もあった。だから、民主化運動を一気に潰つぶしにかかったのでしょう。

中西 当然世界から中国は非難されるわけですが、日本政府だけが、対中制裁の輪から抜け駆けし、天皇皇后両陛下の訪中を九二年に実現させた。この「天皇訪中」のニュースに、よりにもよって、あんな事件を起こした共産党独裁国家に、と愕然とした記憶があります。

平野 陛下は楊尚昆とも握手させられていました。

中西 天安門の血塗られた下手下陛下を握手させたのは宮沢喜一内閣です。平和を願う日本人の善意を政治目的に利用し、親中路線をはたして皇室を利用した外交を無理に進めた。あのときの官房長官は加藤紘一、河野洋平というライン。それを実務で支えたのは外務省チャイナ・スクールの代表的存在といえる谷野作太郎（アジア局長・内閣外政審議室長）だった。まさに戦後日本指折りの親中政

権でした。同じく、このラインが推進した河野談話といい、こうした中国への異常な肩入れといい、戦後日本の左傾化と親中化が行きついて腐臭を放っていた時代でした。

平野 中国も、中国の混迷に心を痛めていた日本に目をつけていたようです。日本はG7などで、中国を国際社会につなぎとめておくべきだと主張していましたがからね。江沢民時代の外交を担った銭其琛の回顧録を読んでみると、天皇訪中をテコにして国際社会に復帰して、西洋からの資金を入れるとはつきり書かれています。

日本としては、中国と諸外国の関係をとりもつことで、侵略国家のイメージを払拭したかったのですが、日本のラブボー



1998年来日した江沢民は中山服を着て宮中晩餐会に出席した。陛下が日中友好を願う歓迎の辞を述べられたが、江沢民は答礼のスピーチで歴史問題を取り上げた。空気が読めていないどころか非礼である(写真提供:時事)

ルを正面から中国が受け取っていたとは思えません。

中西 あのととき、私より年配の毛沢東時代をよく知っている数少ない反共の中国研究者は、天皇訪中に強く反対し、「鄧小平のワナにはまると、日本の歴史の大汚点になりますよ」と必死で警鐘を鳴らしておられましたね。

平野 日本人は相手に対してへりくだって接すれば、相手もわかってくれるという態度で外交に臨みますが、それは間違いです。足元を掬すくわれます。宮中晩餐会に出席した江沢民が歴史問題を持ち出したのがその例です。

このとき江沢民が中山服（人民服）を着用していたことで、共産主義を持ち込むと問題にする人もいました。しかし本来、中山服は軍装、そして日本の学生服をベースとした正装で

もあり、蒋介石も着いていますので、これ自体は必ずしも問題だとは思いません。

むしろ問題は、宮中では和やかな雰囲気を出してほしいと思う日本国民の願望通りにならなかつたことでしょう。江沢民のアピールの場に使われたのは残念でなりません。

中西 民主党・鳩山政権のときも中国のために皇室は利用されましたね。あのととき民主党の幹事長だった小沢一郎が強引に習近平と陛下の特例会見を無理矢理ねじ込みました。当時副主席だった習近平に箔はくをつけさせるという意図が明確でした。

平野 外国の要人と天皇陛下との会見には、「三十日前ルール」が慣例となっているようです。要するに三十日前までに日本政府に申請するのが通例なのですが、小沢氏は無視したわけです。皇室を平穏な形で守るた

めに、ルールを遵守じゆんじゆさせるのは当然です。日中関係のための配慮と称して、結果的に相手のペースに振り回されるのは感心できません。

中西 結局その後、習近平は中国史上最も反日的な対日強硬策を指導するリーダーになったわけですから、民主党政権の罪は重いです。

一九九二年の策謀

中西 天皇陛下が訪中された九二年は、今の緊迫した日中関係への歩みが始まった年でもあったのです。香港の英字紙『スタンダード』という新聞（一九九三年八月二十五日付）によれば、中国共産党はこの年の八月に政治局拡大会議という秘密会議を開いています。その場で、今後の対日戦略として「歴史問題で日本を叩き続ける」ことを、国策として決定したわ

けです。当時の日本は湾岸戦争後で、憲法を改正して軍事的役割を拡げようと議論していたときでしたから、中国はアジアでの政治大国を目指す日本の頭を何としても抑えなかった。しかし他方で、天皇訪中を実現して対中制裁を解除させODAを日本から絞り取り、日中経済関係は太くしていかなくはいけない。この二つを並行して実現させるために、国内の左派と協力して歴史問題で日本を叩くのがよいと結論づけたわけです。それで、まずは戦時徴用問題。それから慰安婦です。韓国と一緒にやろうと。特に中韓の反日歴史共闘をアメリカでやろうと。そういう戦略を決めたのです。

また、尖閣諸島、南沙諸島、西沙諸島を中国領と規定した「領海法」を制定したのもこの年でした。

平野 尖閣諸島は一八九五年に日本

が先占したわけですから、国際法上異論を差しはさむ余地はないはず。それでも、中国が国際社会に対して過剰な日本批判を続けているのは、世界レベルで日本の評判を押し下げ、太平洋に風穴を開け、中国に對抗すると痛い目に遭うという印象を広げ、世界レベルで中国中心の下の関係を構築したいからです。将来の課題として棚上げすれば中国も配慮するだろうと思うのは楽観的です。

華夷(中華)思想のコアともいえる、周辺国家を屈服させて心から信服させ、覇権国家であろうとする発想——もはや文明の病に中国は冒されていると言えるでしょう。

中西 すでに天安門事件で政治改革の可能性は完全に絶たれているわけですから、中国は独裁とナショナリズム、対外侵略を国是として生き延びていくしかありません。

それは鄧小平の経済発展を促した「南巡講話」(編集部注・鄧小平が中国南部の都市をまわり、外資導入で経済建設を目指すとした講話)の中にも表れていました。「儲ければなんでもよし」とする拝金主義と権力主義的マキャベリズムは非常に相性がいい。

平野 ぴったり合っています。私も鄧小平の中では矛盾がなかったと思います。

中西 しかし、そもそも共産主義とナショナリズムは合わないはずなのです。本来の共産主義は国家を否定したインターナショナリズムですから。

平野 そのとおりです。ですから、中国共産党はもはやコミニニストではありません。ナショナリズムによってつまみ食いされた組織です。ナショナリズムと、レーニンが作ったトツプダウン型の強固な党組織が分ち

がたく結びつき、嫌な感じになっています。

中西 対北朝鮮でも、今回の拉致問題に関する日朝交渉で、日本では「また騙されるんじゃないか」とか、「いや今度は本当だろう」とかいろいろ言っていますが、共産主義の性格を考えると、日本が騙されない材料を持つていけば騙してきません。持つていなければ必ず騙してきます。これが共産主義というか共産党独裁の基本哲学ですから。

軍事力も同じです。相手に軍事力がなければ、必ず徹底した力の論理で攻め込んできます。力の論理しかないのですから、決して隙を見せてはいけないのです。

秩序を乱す「鷲」

中西 やはり天皇訪中前後のことで

したが、日本の学者は愚かな「チャイナ・ドリーム」の議論に浸ひたっていますね。とくに経済中心に中国やアジアの将来を予測する議論はおかしなものが多かった。たとえば、日本を取り巻くアジアの経済の未来像は「雁行型発展」で調和のとれたアジアの繁栄が実現する、とよく言われていました。

平野 アメリカ、日本が先行して、その後ろに香港、台湾、シンガポール、韓国のいわゆるアジアNIEsが統くという発展モデルですね。

中西 さらにその後ろにはアセアン諸国が来て、最後尾には中国が付いてくるという議論です。私はこれを知ったとき、なんとユートピアな、非政治的で原始的な発想なのだと思います。帝國的支配を夢見ている中国というのは決して雁ではなく、秩序を乱す手負いの鷲わ。雁の群れに

この鷲が入ってきたらどうなりますかと、私は問い続けてきました。またアジアの共同体などありえないのに、そんな議論を垂れ流し続けていた。

平野 アメリカに次いで日本がナンバー2でいられるというのもおかしな話です。

中西 とくにEUに刺激されたのか、アジアだけで独立した巨大な経済圏を成すという議論も横行しました。マハティールはE A E C構想(東アジア経済協議体構想)を提案しました。つい最近まだあった「東アジア共同体」構想なるものまで、すべて「アメリカは入れないんだ」とか言って、どれもひどい反欧米で、時代錯誤的な大東亜共栄圏の焼き直しなのです。今度は日本に代わって中国が盟主になるわけですが。

平野 研究者の中には、「南巡講話」以降カネの流れが変わり、香港を結むす

節点せつてんとしたグレートチャイナ経済圏が形成されるといふ議論がありました。あるいは、朝貢貿易ちゆうこんの経験を現代に活かした経済秩序ができるという議論もありました。しかし私は、経済でもって政治やナショナリズムの問題を解決できないし、すべきでないと考えています。

上から目線のアジア主義

中西 あの頃、学者やエコノミストはみな「対立のないアジア」が生まれ、世界の中心となって大発展をすると思おもうっていました。しかし、そこでの議論でとくにおかしいのは欧米のグローバル経済を過小評価していることです。アジアの金融ネットワークとか華僑のネットワークの議論も一応しているんですが、欧米の金融を中心とするグローバルイズムの圧力・

世界システムのモーメントきょうめんとがあり、それが世界経済を隅々まで牛耳ぎゅうじっています。「世界経済の中のアジア」という視点を抜きにしてアジアの共同体を論じても始まらない。せいぜい中国の覇権主義に場を提供するだけになる。

それから、これもまた九二年ですが、冷戦が終わってアメリカがフィリピンのスービックから撤退しました。米ソの影が薄くなったアジアで、代わって中国が華夷秩序を復活させる「中国の夢」を実現させようとする時代が始まってゆくわけです。最初は経済中心でしたが。

平野 中国は経済も政治目的に使いますから、経済の論理だけで考えるのは危険です。

中西 この二十年ほどの日本における中国経済論やアジア経済論は、中国の地域戦略に乗った大変不健

全な経済言説だったと思います。識者が新理論を編み出そうという情熱はわかるのですが、学問をする上での安易な贖罪意識しよくざいが根底にあったり、反欧米主義を情念として抱え込んだりするのは健全ではありません。

平野 そこでアジア主義の一つの流れを考えざるを得ません。アジア主義は、黄色人種が団結して白色人種に対抗しようというのがベースにあつて、宮崎滔天みやざきたうてんが孫文を支援したり、大川周明もイスラムとのつながりを意識したりしていました。

中西 戦前はそういう意識があつたかもしれませんが、戦後になつて一方では人権とか民主主義とか言っておきながら、反欧米では合わない。戦前の情念というか怨念が噴き出してきたようです。それに日本であれ中国であれ、アジア主義は得てして軍国主義につながりやすいと思いま

す。

平野 「アジア人の、アジア人による、アジア人のための」と言うのと、聞こえは良いのです。習近平も好んでよくこのフレーズを使っています。私もかつてアジア主義に憧れた時期がありました。しかしよく考えてみると、アジア主義を唱える国が、上から目線^①で指導していくスタイルにならないことを得ないことに気づきました。

中西 最近の中国は反欧米色をより色濃くして、習近平は、上海協力機構とは別の国々でこの五月にやはり上海でCICA(アジア相互信頼醸成措置会議)を開きました。BRICSの会議もやりました。これらの場で、中国は日米主導のIMF、アジア開発銀行の向うを張って「アジアインフラ投資銀行」や「新開発銀行」構想をブチ上げました。

平野 わかりやすい反欧米と反日で

す。

中西 しかし、これで日本としては、むしろやりやすくなったと思いますよ。そこまで反欧米で走る中国には、もう戻ってくる架け橋はありませんから。

平野 ドライに競争すれば良いとい

うことがはっきりしてきました。

中西 結局、中国というのはロシアと並んで世界の困った君なんです。ただ、日本の場合地理的に隣接しているということで、PM2.5や尖閣問題があるので放置はできません。それで私の暫定的な結論とし



並んで歩く2人の「世界の困った君」(写真提供:共同)

ては、なるべく中国と米英を張り合
わせてアングロサクソンに処理して
もらうのが一番いいと思うんです。

平野 その意味では、アボット政権
のオーストラリアが日本支持に回っ
てくれたのは心強いですね。中国と
日本を比較して日本を評価してくれ
ました。

宿命的歴史観

中西 ラッド前首相は中国語がペラ
ペラで、中国のマーケティングと金が魅
力だと言って中国にすり寄った。し
かし、さすがにひどい国だと気付い
てアボット首相は方向転換しました。

オーストラリアよりワンテンポ遅
れているのが韓国です。朴槿恵政権
は李明博政権よりももっとべつたり
と中国にのめり込んでしまいました。
どのように抜け出すか見物です。そ

のうち自分で気づいて戻ってくるま
で韓国とは「謝絶」していてもいいか
と。

平野 韓国を巡る状況は遺憾な点が
多いです。日本の韓国研究者は、日
韓友好のために頑張ってきたのにな
ってことだと思っているでしょう。

最近、韓国『中央日報』で、慶應義
塾大学の小此木名誉教授とソウル大
学の教授との対談を読みました。小
此木先生は、日本国内は単純ではな
く、いくら日本が譲歩してもいつそ
う厳しい条件を突きつける韓国とは
関係を持ちたくないという雰囲気
が強まり、それは侵略ではなく距離を
置くという問題ゆえ、韓国にも考慮
して欲しいと仰っていました。

本来、韓国にも日本文化オタクは
いるし、欧米、そして日本のことを
よく知っていて、韓国の独立自主の
ためにも日本との関係を適切に保つ

べきだと思う人もいるわけです。

しかし一方韓国は、伝統的な国際
秩序・政治思想の文脈では、中国に
次ぐナンバー2の国だと思っていま
す。我々は中国に長年朝貢してきた
上に地理的にも近い。だから朝貢し
ていなかった野蛮な日本より格上だ
と思っっています。ゆえに日本に頭を
下げたくないし、対等であることも
嫌がる。宿命的な歴史観があるのです。

中西 経済においても韓国は中国へ
の依存度は高いですね。最近の報道
で韓国の対中直接投資が八〇%増と
いう報道もありました。他方、日本
の対中投資は四〇%減とのこと。す
日本はもとよりどの国も対中投資
を減らしているのに、韓国はのめり
込んでいる。

平野 中国抜きに韓国など、もはや
あり得ないわけです。

中西 中国経済が危険だという兆候

が見え始めているのに、韓国はまだ中国に深く入れ込んでいます。どうもいつも朝鮮民族は行くところまで行ってしまいます。いわば、毒を食らわば皿まで、です。特に相手が中国だと思考停止に陥る。

平野 まさに事大主義です。

処女三千人、宦官千人

中西 歴史を振り返ってみると、朝鮮にとって朝貢は非常に過酷な負担だったわけです。女性を中国に人身御供として差し出すのは朝鮮半島の伝統のようで、明の時代には、処女三千人、宦官一千人用意しろとか、牛や馬は一千頭よこせとか無茶苦茶なことを朝鮮は要求されていた。

それから豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、日本兵が攻めて来ますが、実はそれ以上に明の兵士がひどかったとい

ます。助けに行ったはずの朝鮮で略奪暴行の限りを尽くした。朝鮮宮廷では日本よりも明をどうやって追い出すかが大テーマになつていたくらいです。

平野 最近『朝鮮日報』で面白い記事を読んだのですが、習近平は朴槿恵との会談やソウル大学での講演の際に、我々中国と韓国は血のつながった親密な仲であり、対日共闘を進めてきたと強調し、例として豊臣秀吉の朝鮮出兵を挙げました。しかし、実際には、明の軍人は食糧や補給が尽きると乱暴狼藉を働き、朝鮮の官僚をひどい目に遭わせた。だからその記事は、中国のリップサービスを本心で受け取ってはならないと警告していました。

明に対する恨もそれなりにあったはず。ところが朝鮮・韓国の歴史観では、明から多大なる恩恵を受

け、最も親密な属国であったことにして、自己満足しています。

中西 韓国は中国が相手となると、なぜ本音を言わないのか。そもそもなぜ戦わないのか。朝鮮人がベトナム人のように勇敢なら今のようにならなかつたでしょう。

平野 大国に対する強烈なトラウマがあるからでしょうね。元朝の時、高麗はズタズタにされました。明との関係が一番「穏やか」です。北方から台頭した満洲人中心の国家・清に攻められると、朝鮮国王は三跪九叩頭の礼で許しを請いました。丙子胡乱という事件です。それまで、朝鮮人は満洲人のことをオランケ(野蛮人)と呼んで見下していたのですが、これ以来一八九五年の下関条約で独立が決まるまで屈辱的な朝貢を強いられました。

このように大陸の国家に対して朝

鮮は無防備であり、攻められたら土下座して服従しなければ生きていけないのです。今の中国も大国ですから、アメリカや日本などの自由主義国家よりも習近平に付いたほうが良いという恐怖心めいた事大意識があるのでしょうか。

中西 十七世紀、清朝から圧迫されたとき、朝鮮は徳川幕府にすり寄ろうとします。秀吉の出兵が終ってまだ数十年しか経っていないのに、日本の助力を得ようとして、「我々が日本と通交していることをあえて清朝に伝えよう。そうすれば清も少しは大人しくなるだろう」と日本を利用しようとするのです。清は日本を怖がったそうですね。

平野 清は基本的に日本を嫌います。騎馬民族国家として内陸の問題に追われていました。一八七〇年代までは日本のことを良く知らないし、

知りたくもないという時代が続きます。

安倍の一言に韓国蒼白

中西 そこは徹底していますよね。清がひどいことをするというので、清を日本とぶつけさせようという策略を朝鮮王宮で議論しているんです。これには確かな記録が残っています。

平野 先日、安倍総理が「半島有事の際に在日米軍が出動するには日本の同意が必要」と言った。それで韓国は血相を変え、米韓同盟があるので在日米軍は無条件で来ると反論しました。反日なのに日本という場を頼り、自立の気概がありません。日本に甘えています。

中西 安倍演説は核心を突いたんですよ。

平野 だと思えます。「日本の存立に

とって非常に重要な意味を持っている友好国で問題が起こり、それが日本にも大きな影響を及ぼす場合には……」というくだりは、ある意味踏み絵で、韓国に判断を迫っているのかも知れません。ただ歴史的に見て、在日米軍、日米安保は韓国を助けるためにあると言っても過言ではないと思います。

中西 台湾もその中に含まれますね。アメリカの念頭にあるのは終始、中国の脅威で、日本、台湾、朝鮮の安全というのはひとまとめになります。米軍が沖縄の基地をいまだに維持しているのもそのためです。冷戦中でさえ、ソ連の脅威は刺身のツマのようなものだったです。

平野 二〇一二年の夏には日韓の防衛協力の枠組みができる予定だったのに、寸前で李明博が潰しました。両国の防衛関係者レベルでは合意す

る気満々だったわけですが。

中西 軍事情報包括協定(GSOIMA)のことですね。中国から締結するな、と圧力をかけられた李明博は恐れをなして、日本との調印式を二回もドタキャンしました。実はこうした韓国の中国へのスリ寄りに対しアメリカの国防総省(ペンタゴン)はカンカンになって怒っています。

丹羽宇一郎の不明

中西 冒頭で申し上げたように、中国の脅威は古くからあったのですが、戦後の日本人の中には中国はつねに平和志向の国だ、と主張する人がいます。「日本は中国に攻め入ったが、中国は日本を侵したことはないじゃないか」と。

平野 それは中国の宣伝を何も考えずに鵜呑みにしているのでしょうか。

中西 丹羽宇一郎とかいう元中国大使は、中国は今後経済超大国になり、世界中に大中華圏が形成される、その時には日本は中国の属国になればいいと言っていました。この言動の心理構造は完全に伝統的な朝鮮人のそれと同じです。

もちろん丹羽発言に賛同はできませんが、かといって中国の脅威に専ら力で立ち向かうという選択肢も日本にはないでしょうね。ならば、中国の膨張を阻止するためにどのような国家運営をしたらいいのか。ここから現実的な議論をする必要が出てきます。

平野 独力では無理でしょうから、中国を問題視している人々と直接・間接に関係を強めるしかない。例えば台湾です。一九九六年の総統選挙のときにミサイルを台湾近海に打ち込まれるなど、台湾の人々は歴史的

にまた日常的に中共からの圧力に悩まされています。

中西 当時私は北京にいたんですが、日本大使館の新聞報道で知り驚きました。そのあと、人民解放軍のOBが運営するシンクタンクで討論会があったんですが、そこで私は遠慮会釈なく「あなた方ね、自由で民主的な選挙をやっている台湾をミサイルで威圧して、アジアの平和を脅かしているじゃないか。日本もアメリカもこれを見て一層警戒しますよ」と言ったのです。そしたら、控室にいた人民服とか軍服を着た連中が出てきて、「お前ら日本人は南京で何をしたんだ」とか「九・一八事件(満洲事変のこと)はどう思うんだ」とか歴史論争を急に始めたのを覚えています。中国は、日本に対しては、「苦しいときの歴史問題」というか、自分たちが不利になると、突然、歴史を利用する

んだ、とよくわかりました。

平野 私はそのとき台湾を一周して
いました。歴史的経緯から台湾は政
治に深い影を残しながらも、自由で
民主的な国家として生まれ変わった
画期として初の総統直接選挙をする
ところでした。台北では中正紀念堂
で元宵節げんしょうつの祭りが開かれ、李登輝総
統が点灯されるといっているので行っ
てみました。アジアにおける民主化の旗
手であった李総統を生で拝見して感
動したものです。

翌朝、宿でテレビをつけてみると
臨時ニュースで「中共が台北沖にミサ
イルを飛ばすと警告を発している」と
言っていました。これは大変だと思っ
て外に出てみたら、意外にもみんな
平常心でした。しかし、誰もが「共産
党が脅すからこそ、我々は完璧に自
由で民主的な選挙をやる」と言って一
致団結していました。

中西 台湾が一気にまとまりました
ね。

体制競争の時代

平野 非常に引き締まったと思いま
す。日米安保の再定義がこの事件を
機になされ、台湾の民主主義を間接
的に守ることもつながりました。

中西 あのと民主主義の持つてい
る強さを感じました。しかし、中国
は武力ではなく今度は金で攻めてく
るようになった。問題になったサー
ビス貿易協定はまさにそうです。し
かし、今回も台湾は立ち上がりまし
た。**平野** 「ひまわり運動」と呼ばれるも
のですね。学生達が立法院を占拠し
抵抗しました。

中西 市民も学生を平和的に支援し
ました。早期の中台統一を画策する
馬英九政権の「親中前のめり路線」を

粉碎したわけです。

平野 自由で多様で豊かな社会を維
持するために、日本は台湾に学ぶべ
きだと思います。

台湾人は歴史の複雑さゆえに、そ
して本省人と外省人、福佬ふくろうと客家かか
などアイデンティティーもバラバラの
せいか、政治的な話題で侃侃かんかん諤諤たつたつに
喧嘩もします。立法院では取っ組み
合いもあります。しかし、これは言
論の自由のあらわれでしょう(乱闘は
少々物騒ですが)。日本人はタブーに
触れるのを嫌い、政治を語りながら
ない傾向があるように感じます。

中西 それでも最近ようやく日本人
も語り始めたかなと思います。問題
なのは日本のマスコミです。今回も、
この台湾の「ひまわり運動」のことは
ほとんど報道しなかった。香港の普
通選挙要求の大市民運動も無視しま
した。



台湾の立法院の議場占拠を支持してデモ行進する香港の人々。日本も自由と民主主義を尊重する国々と協力して中共に対抗すべき。写真提供：共同

平野 「Occupy Central」(中環IIセントラルを占拠せよ)」という運動ですね。

中西 香港の行政長官は選挙ではなく実質的には北京政府の指名で選出されています。民主派団体「オキユパイ・セントラル」がこの制度を改めるために、住民投票を実施しました。報道では約八十万人もの人が投票したと言われています。今となつては鄧小平の口車にすぎなかった「一国二制度」のウソに香港の住民の怒りも限界にきているということでしょう。

平野 もはやこの枠に縛られたくないという証左ですね。

中西 これを機会に学生同

士も初めてお互いに行き来していました。占拠中の台湾立法院の議場に香港の学生が来て演説をしていました。

平野 これまで香港は台湾を泥臭い、台湾は香港のことを植民地と言つて、互いに軽んじるようなところがありました。しかし、今は同じ言語を使う者同士、これまで享受してきた自由を守るといふ共通の目的に向かつて、中共のやり方に抵抗しています。

中西 これに日本は合流しないといけない。本当の意味での集団的自衛権というのはこれかもしれませんね。自由と民主主義の理念を共有する人々が集まって、自由を守るために毅然として力の論理に対抗する。

平野 そうですね。まさに現代は巨大な体制競争の時代です。中共の強引なやり方と我々の自由な社会、国や地域の大小はあれどお互い尊敬し

あつて共存していくのにどちらがふさわしいか、外交上の競争が起こっています。

中西 中国共産党に対抗するため、言論の自由を享受し、互いに独立した個人あるいは自由な社会として尊敬しあう人々の力を結集する必要がありまます。自由を徹底的に否定して自分たちの言うことを聞け、というやり方は二十一世紀のアジアではもはや通用しないことをわからせなければいけません。

平野 実は中国国内にも共産党のやり方に対して、心の中では苦々しく思っている人々は多々いるわけです。彼らのためにも、日本、台湾、香港の連携を強めていくのが好ましいと思います。

中西 アメリカもパートナーに加え、一層強固なものにしなくてはいいけません。

平野 さらに、東南アジアには中共のやり方に内心嫌気が差した国がありますから、そういう国とも連携が取れるでしょう。例えば、ミャンマー、インドネシアといった国です。
中西 こうした連携ができるかどうか。そこが二十一世紀のアジアをめぐる焦点、いわゆる「戦略的な要衝」です。それを認識して具体論は現実的なスタンスに立脚して手を打つていけば、勝算はあると思います。

福沢諭吉の復権

中西 この二、三年、尖閣問題や慰安婦問題で中韓との関係が悪くなつて戦後の日本人もようやく目覚めて、はじめて真実が見えてきたと思えます。それに伴つて、福沢諭吉の『脱亜論』が今ものすごく復権していますね。私の若い頃は、『脱亜論』なんて全く

間違つたひどい議論で悪くすると日本軍国主義の源の一つとされ、日本のアジア侵略を生んだ思想の典型だと見なされていきました。「脱亜入欧なんてけしからんアジア敵視だ」とかね。
平野 私も多くの書物でそのように教わりました。しかし、とんでもない偏見です。

福沢は単純に西洋バンザイと言っているわけではありません。当時の状況では、西洋が参考になるから西洋の思想や技術を取り入れようと主張したにすぎません。福沢の思想の肝心な点は、一国と一身の独立をリンクさせて、よりよい人類社会を築いていこうということなのです。

だからこそ、福沢は朝鮮で文明開化に賛同した金玉均ら開化派エリートを助けたわけです。お互い自立して頑張っていこうと。しかし一八八四年には、金玉均らが清の影響を排

除して徹底した近代化を推進するためにクーデター^{クーデター}甲申事変^{甲申事変}を起こしたものの、短期間で失敗しました。『脱亜論』が出たのは、このような文脈を踏まえる必要があるでしょう。

中西 福沢は現実にはヨーロッパとアメリカの両方を幕末に見てますでしょ。ですから、アジアを世界の中に置いて見ることができたのです。そうすると、中韓とだけは謝絶する他ない、とすぐに分かるんですよ。あえて深く付き合わない、ということとで今でも十分共感できます。

平野 これまでの日本外交は、中韓に配慮すれば彼らも理解してくれるだろうという姿勢でした。しかし、彼らは日本のベースには合わせませんし、配慮を考慮してくれません。彼らには彼らなりの抜きがたい優越感、上下関係があり、それを崩したくないのです。

中韓の、自分たちの解釈の絶対性や上下関係を重んじる朱子学的な伝統が、近代の内政と外交にも現れているのを見て、福沢もこれは違うと思ったのでしょう。

中西 福沢が言いたかったのは、「この人たちと友達になれるかと思っただけでも、やっぱり難しいですよ」となるべく距離をとってお付き合いしたほうがよろしいんじゃないですか、とにかく私たちには文明開化や国力をつけるという急務の仕事がありましてから、かまっている暇はありません。

平野 当時は西洋化の波に取り残される、独立が危うくなる時代でしたから、まずは近代化の長所を取り入れて、そのうえで日本自身が新しい価値を発信する。実はこのやり方は現在でも求められていると思えます。福沢は中韓どちらにも評判悪い

ですが、中韓も福沢の考えを取り入れたほうが良いと思います。

中西 大事なのは、中国や韓国に淫^{いん}すること（過剰な関心を向け、もつと大切なことを忘れてしまう）のがいけないということですよ。地球儀を見ればわかるように、中国にしる韓国にしる、パプアニューギニアみたいなそれぞれ個性のある文化の一つなのです。地理的に隣だからといって特別視すべき理由はない。もつとマクロな視点で突き放して見るのがちょうどいいのです。

平野 我々は福沢の肖像画を一万円札に載せていることを未来永劫誇り、世界に発信していくべきなのです。福沢の指針をもとに日本がより良き社会を目指し、自由と民主主義の理念を持つ国々と協力すれば、中共の脅威や日本への中傷を恐れる必要はありません。